

정재정(1998)『일본의 논리』 현음사

(鄭在貞(1998)『日本の論理』玄音社)

鄭泰暎

日本と韓国の近代をめぐる歴史認識の溝が想像以上に大きいのは周知の事実である。この歴史認識の溝を埋める両国の歴史教育研究者による交流は1982年の歴史教科書問題からはじまったとされる(君島、1996)。その諸交流の中で最も目立った成果をあげたのは1991年から始まった「日韓歴史教科書研究会」であった。この研究会は日本の歴史教科書における朝鮮・韓国関係記述を研究対象として行われた。日本の歴史教科書の内容と教科書検定制度について両国の歴史教育研究者によって初めて検討されたことがこの研究会の成果である。両国の歴史教育研究者による共同研究の過程で露呈されたもっとも大きな論点は日朝関係史の捉え方であった。特に近代をめぐる日朝関係史の捉え方が日韓両国の歴史認識の溝を作り出す淵源であった。

解放後韓国における日本の歴史教育に関する研究は政治的な障壁もあり、1982年の日本の歴史教科書問題が表面化するまでは低調であった。本書もその歴史教科書問題を契機に著者が行った研究成果をまとめたものである。著者の関心は日韓両国の歴史教育と相互認識の実態調査をし、その結果を日韓両国民に知らせ、両国間の歴史認識の間隔を狭め、相互理解を増進することであった。このようにして韓国人を対象に書かれたのが本書であり、その後日本人を対象としたものとして鄭在貞(1998)が刊行された。

韓国人が書いた歴史教育問題をめぐる本は他にもあるが特にこの本を取り上げた理由は以下の二点にある。まず、実証的な研究が少ない中で本書は日本の歴史認識と歴史教育に関する実態分析が日本の政治界の動態、自由史観研究会の主張、歴史教科書、学生を対象にしたアンケート調査結果などの分析に基づいて実証的に行われた点である。次に、日韓歴史教科書研究会をはじめとする諸共同研究で行われた本格的な議論をふまえた上で書かれたとい

う点である。こうした点で本書は、日韓歴史教科書研究会の日本側の研究者による君島（1996）と対照的に位置付けられる。両書は日韓歴史教科書研究会で行われた、日本の歴史教育をめぐる研究成果の報告である点において、共通している。しかし、両書は日韓歴史教科書研究会の共同研究過程を踏まえているものの、韓国人と日本人というそれぞれの観点から書かれた点で異なっている。また、本書は日本の歴史教育研究者の論理から政治界の動態にまで言及して日本の歴史認識の全体像を研究対象に入れているが、君島（1996）の場合は日韓歴史教科書研究会の共同研究過程で提起された議論を中心に書かれており、その点でも異なっている。結局本書は、日本人が歴史（特に日朝関係史）を考える論理（「日本の論理」）を韓国の歴史研究者によって、日本の歴史認識と歴史教育の実態分析をとおして、批判的に検討されたものであるといえる。

著者は韓国ソウル大学で歴史教育科を卒業し、東京大学大学院の東洋史学の修士課程を経て、1992年ソウル大学での博士論文「일제의 한국철도침략과 한국인의 대응（日帝の韓国鉄道侵略と韓国人の対応）」によって博士学位を取得して以降、朝鮮近代史研究を専門にしている。

先ず、本書の内容を目次にそって簡単にみておこう。

はじめに

第1部 今日本の歴史教育でどんな事がおきているか

- I 横行する国家戦略的歴史教育論の亡霊
- II 司法部の審判を受けた教科書検定
- III 歴史教育の構造と内容はどう変わったか

第2部 日本の歴史教育は朝鮮史をどのように教えてきたか

- IV 皇国史観のクビキから脱しえない朝鮮史教育の実態
- V 過渡期の高校《日本史》教科書に反映された朝鮮史像
- VI 改善された歴史教科書の朝鮮近代史叙述

第3部 両国の歴史認識の溝をどう埋めるべきか

- VII すれちがう日韓の歴史教育と歴史認識
- VIII 両国における日清戦争観の相克
- IX 衝突する両国の日露戦争観

X 相互「理解」と「共存」のための対話

後書き

「はじめに」では「歴史学を研究する韓国の歴史研究者の立場で日本の歴史認識と歴史教育にながれている日本的論理を究明する」ことと、「[韓国人の：評者註] 日本の歴史教育と歴史認識の把握に役立ち、日韓両国の歴史認識の改善に寄与する」こと（8頁）という著述目的が述べられている。

第1部では最近おきている日本の歴史教育と歴史認識をめぐる動向を分析している。その分析対象としてあげられているのが政治界の「妄言」と学界の「自由主義史観研究会」、「文部省の歴史観」である。

第2部では日本の歴史教育が韓国の歴史をどのように教えてきたかを日本の歴史教科書に書かれた朝鮮史の記述内容を中心に分析している。この歴史教科書に書かれている朝鮮史の内容が日本側の認識の実態を反映しているものとして位置付けられている。そこでは、1980年度前後の日本の歴史教科書に書かれた朝鮮史とかかわる叙述内容に対する文部省の検定実態についても分析されている。

第3部では両国の学生が日朝関係史をめぐる同一事象に対しても正反対の見解をもっている実状を明らかにしている。このような歴史認識の実態は1992年に作成された「日韓相互理解アンケート調査集計結果報告書」をもとに分析されている。ついで日韓両国の歴史研究者と歴史教育者が歴史認識の相互理解を増進するために行なってきた活動について紹介している。以上ごく簡単に本書の内容をまとめてみたが、以下に評者の気づいた点をいくつか指摘しておきたい。

第一に、本書を書いた著者の観点についてである。本書は、従前の研究より分析対象の設定と分析が緻密であることは評価できる。しかし、著者の論理は同一事象に関する日本側の論理を取り上げながらも、日本側の観点を配慮していないものである。歴史認識の共有に要求される日本側の観点を配慮して研究してほしかった。これは「日本の論理」を明らかにするという、著者の観点が韓国人の観点を超えられず、いわば歴史をみる「韓国人の論理」が潜在的に溶け込んでいるためと思われる。結局、著者の「歴史認識の共有」と「日本の論理を掘り下げる」という作業は、韓国人の歴史研究者が歴史を考

える観点の限界を超えるものではなかった。

第二に、日本の歴史認識を分析する対象の範囲についてである。著者は日本の歴史教育とかかわる動向を「国益優先主義的な歴史認識ないし国家戦略主義的な歴史教育論」と規定した。その動向の根拠として政治界の「妄言」と「自由主義史観研究会」の論理が、あたかも日本人全体の歴史認識を代表しているかのように取り上げられている。もちろん政治界と自由主義史観研究会などの動向が、一般民衆に広く影響を及ぼしているという点では、日本の歴史認識を代表しているともいえる。しかし、日本の歴史教育に関する認識を「妄言」と「自由主義史観」のみにみるのではなく、それ以外の多様な認識も提示してほしかった。

第三に、著者による「皇国史観」の定義についてである。まず、著者は「戦前の皇国史観」と「戦後の植民地支配の施恵論」が、日本の歴史教科書の日朝関係史記述の歴史的背景であると設定している。また、アンケート調査結果でも「戦前の皇国史観」が、現代政治界の歴史認識の根源になっていること、それが学校で教育されて一つのディスコースになっていることを、指摘している。すなわち、著者は「戦前の皇国史観」が、今日の日本の歴史教育に絶対的に影響していると断定しているのである。この断定を認めるなら、「戦前の皇国史観」は日本人ばかりでなく朝鮮人・韓国人にも、歪曲された朝鮮観を扶植した主体であるとみるべきではないか。しかし、どのような記述を「皇国史観」や「植民地史観」とみるかについての具体的な説明がなければ、説得力に欠けると思われる。あわせて「戦前の皇国史観」が韓国人の朝鮮史観に、影響しているという点にもふれる必要があるだろう。これこそ日韓両国の共同研究課題であり、著者が希望している「歴史認識共有」のためにも必要な点であると思う。

第四に、アンケート調査の限界についてである。両国の歴史認識と歴史教育の実態に関する学生を対象にした画期的なアンケート調査は、これからの研究課題の設定に寄与するところがある。このアンケート調査では、日本人の学生を対象として、韓国に対する知識とイメージを問う質問を中心に実施されたものである。日本の韓国認識に最も影響を及ぼしている主な知識源・情報源が、日本の歴史教科書を通じた歴史教育にあるという、アンケート調

査の結果は著者の全般的な主張と一致している。しかし、著者が行ったアンケートは、一回性のものなので資料的な限界は否めない。それを克服するための定期的な調査、信頼性を確保するための追跡調査、調査時点における社会情勢の変化などを考慮に入れて実施してほしかった。

全体的には、著者が「戦前の皇国史観」に影響された歴史認識と歴史教育を、「日本の論理」と批判し、「日本の論理」を知らない韓国人に対する、両国間の相互理解のためのテキストとして、提示しようとしている点は注目に値する。さらにこれからの日本の歴史教育に関する研究の方向性を提示した点、韓国人に対して「日本の論理」を伝えた点も肯定的に評価できる。以上のように、本書は著者が意図した歴史認識の共有への手がかりになるとともに、これからの日韓両国の歴史教育に関する研究を促すものとなるだろう。

文献

君島和彦（1996）『教科書思想』すずさわ書店

鄭在貞（1998）『韓国と日本』すずさわ書店